

三重県博物館協会 新博物館検討担当部局との意見交換会 意見概要

日 時 平成19年9月28日(金) 13時30分～15時30分
場 所 三重県立博物館 3階会議室
内 容 13:30～13:40 中村幸昭会長あいさつ
13:40～14:10 これまでの経緯と現在の状況説明(生活部)
14:10～15:30 意見交換

会長あいさつ

- ・ かつてのセンター博物館構想では、「水」がテーマであったが、北川知事になりハコモノ整備凍結の方針となり、計画は打ち切りになった。今回の新県立博物館では、県民の声を十分に反映させた博物館をつくらなければならない。県内の博物館の声を十分に聞き入れ、連携のできる博物館を目指してほしい。

主な意見の内容

- ・ センター博物館の白紙凍結からの10年間で何が変わったかということ、PFIの制度は下火になってきたが指定管理者制度という新しい方向が出てきた。また、県立博物館では、サポートスタッフが生き生きと活動しており、10年前とは雲泥の差がある。このような流れを十分に考慮に入れながら進めることが大事だと思う。
- ・ 将来的には、道州制の動きも出てくると思うが、東海3県の結びつきなどが必要となってくるだろう。三重県らしさは大切であるが、それに固執せずに、もっと前を見ていく必要がある。50年先、100年先を見据えなければならない。
- ・ 県立博物館を新たに建設する場合、建設地が基礎として大切である。どこに建てるのか、どんなものをつくるのかなど、場所や費用についての案を早く出してほしい。その方が、県民にも分かりやすく、議論も進んでいくのではないかと。
- ・ 観光面でどのように活かしていくのか、今の博物館には、自分で来館者を呼び込むという発想がまだまだ足りないと思われる。
- ・ 指定管理者制度について、もし導入するとしても学芸部門は直営とすべきである。民間の指定管理者が館の運営全般を受託している長崎歴史文化博物館では、指定管理者側が雇用している学芸員は5年制の嘱託職員であるが、そのような体制で、調査・研究を継続的に進められるのか疑問である。
- ・ 人材育成支援機能について、どのような内容を考えているのか。例えば、博物館実習生の受け入れ体制をつくってもらえないか。
- ・ 「総合博物館」の位置付けがどのようになされるのか心配である。資料の収蔵をしっかりおこなうという考え方は高く評価できる。歴史資料の散逸や滅失などの問題を考えるにあたっては、近・現代の歴史資料、とりわけ文芸資料や昭和・平成期の歴史的な行政文書が急速に失われつつある現状に対して、十分な注意を払ってもらいたい。
- ・ 新聞によると、津市内の2カ所が県立博物館を建設する場合の候補地として、報道さ

れているが、博物館の運営面や集客の問題を考えると、観光地である「伊勢」についても検討の余地があると思う。津には、県総合文化センターなど、たくさんの公共施設があり、今あるだけでも十分ではないか。

- ・ 誰を主対象にした博物館にするのかが大事である。大人が楽しむものとするのか、子どもを対象とするのかという点でいうなら、やはり子どもが自然科学に触れ勉強したいと思えるようなところとなるべきだ。学校に利用してもらうためには、できるだけ公共の交通機関で行くことのできる立地にする必要があるだろう。また、小学生が大勢で来ても、受け入れができるような、講義室などをもった施設をつくるべきである。
- ・ 新たな文化振興拠点として捉える大きな理念が掲げられている一方で、博物館の機能として記されていることは、博物館ならば当然持っているべきものばかりであり、ギャップがある。本気で新しい県立博物館をつくらうと思っているのか。形だけでよければよいと思っているのか分かりにくい内容だ。
- ・ 長野県立歴史館は、公文書館機能と博物館機能が併設された先進的な館である。公文書館も全国さまざまあるが、教育行政と首長部局の行政との狭間で、貴重な古文書や公文書が失われることのないよう、50年、100年先を見据えた考え方をもって、できるだけ新しい形の公文書館を整備してほしい。
- ・ 自然系の博物館活動としては、単なる標本資料の収集だけでなく、県内の動植物の遺伝子を保存する取り組みに力を入れてほしい。これは県にしかできないことである。
- ・ 最近、県内のある高校で、標本室を職員の更衣室にあてるために、標本が捨てられるということがあった。かつて、県内の高校の標本室にある標本リストを作成しようという話しもあったが、今回のように貴重な資料が失われることがないようにする取り組みが必要ではないか。
- ・ たとえ観光地であっても、博物館の運営は大変である。県立博物館は、観光というよりも、県民第一の立場で整備してほしい。
- ・ 博物館の運営にはお金がかかるものであり、採算性だけの考えでは、博物館は潰れてしまうだろう。できるだけ補修費用がかからない建て方にすべき。まず、ある程度の規模で建てておいて、10年ほどして新館を建てるなどの段階的な整備の考え方があってよいのではないか。
- ・ 今、三重県内の博物館の現実をみると、例えば、四日市市立博物館や桑名市博物館の収蔵庫は満杯な状態である。資料によっては、亀山に持っていった方がよいとか、それぞれの地域に則した資料を地域博物館に集めるなど、県内の博物館をコーディネートするセンター機能的な役割を果たす構想があるとよい。
- ・ 将来、県内の博物館がつぶれたり閉館したときに、収蔵資料の保護・保存に、県立博物館が中心となってケアできるような取り組みはできないか。
- ・ 各博物館には、自館のテーマと直接的な関係がなく、あまり活用されないままになっている寄贈資料などがあるが、そうした資料を各館が相互に、貸借や移管するなどし

て活用する仕組みができないか。県立博物館には、そのための調整役となり、県内の博物館の共存共栄のための中核として機能する博物館になってほしい。

- ・ 三重の県民は186万人しかいない。自分で博物館に来られない老人と子どもを除くとさらに人数は少なくなる。したがって県民だけを対象とすると、どうしても遠足の子どもたちが中心になってしまう。これでは、多数の来館者は望めない。県外の人に来てくれる、県外に誇れるものにしなければならない。
- ・ いろんな意味でのセンター博をつくってほしい。現博物館の職員がもっとしっかり博物館について構想を持っていなければならない。プロが何をしているのかと言われるだろう。PFIや指定管理者制度についても、絶対に困るとみんなで言わないといけないのではないか。
- ・ 自然系の資料をどのようにしていかなければならないのか。また、人文系でも、寺社の資料がどんどん失われている現状である。このような状況をどのようにしていったらよいかみんなで考えなければならない。
- ・ 県としてやらなければならないことは何なのか、何が大事で、何が欠けているのかを考えていかなければならない。
- ・ 「三重県図書館情報ネットワーク」のような機能を構築していくことが大事である。そのためには、まず各館で資料目録をきちんと作り、統一したフォーマットのもと、パソコンで検索できるデータベース化を行う必要がある。
- ・ あと半年早く、この会を実施してほしかった。そうすれば、もっと我々の言葉を汲み入れてもらうことができたと思う。県の博物館が果たす役割をしっかりと盛り込んでもらいたい。
- ・ 博物館をつくるのか、観光施設をつくるのか、方向性が見えてこない。いろんなことを何でも盛り込んだものではなく、いらぬところを削ぎ落として、三重県にはこんな博物館が必要だというイメージをドーンと説明するような資料がほしかった。そこで、我々の意見が必要なら出していい。
- ・ 今からでも遅くはない。積極的に発言していくべきである。
- ・ 博物館の本質は少しずつ変わってきている。学芸員は10年前に比べると日常的な仕事量は増え、負担が大きくなってきている。これからも現場の意見が反映される場をつくってほしい。
- ・ カモシカなどの天然記念物について、種の保存の観点からも、動物が生きている状態で見られるところがほしい。
- ・ 学芸員を育てていくことは、PFIや指定管理者制度の体制下ではできない。限られた資料を展示するだけのテーマ博物館ならば、PFIや指定管理者制度でもできるだろうが、県立博物館はそうはいかない。県内の市町や民間の博物館の中核的な施設と

して、相談ができるような博物館であってほしい。

- ・ 博物館は建設時だけでなく、その後の運営費もしっかり確保できるよう取り組んでほしい。
- ・ 今まで、このように協会加盟館のメンバーが集まって話し合いをする機会はあまりなかったのではないかと議論というのは、人の話を聞いて、自分の意見が変わっていくプロセスが大事であって、ペーパーで意見を出して終わりというのではいけない。今後、県立博物館検討のスケジュールとは関係なく、協会としてさらに議論する場を設けたい。

《意見交換終了後に紙面にもらった意見》

- ・ 博物館の学芸員は、資料といまとのパイプ役・フィルター役である。人のネットワーク、生涯学習、文化の拠点を博物館として考えるのであれば、資料を通じた博物館活動と運営をしっかりと盛り込むべきである。
- ・ 県立博物館には、県内の博物館ネットワークの中核になってもらいたい。例えば、「保有資料のデータベースの共有」や「資料保管・貸借の利便性向上」などが考えられるが、その根幹をなすものは、人づくり、人材育成だと思う。
- ・ これは、県立博物館の学芸員の資質確保にとどまらず、パートナーとなる市町や民間の博物館の学芸員の資質向上も必要ということである。特に市町の学芸員は事務職採用が多く、他部署への異動も考えられ、安定した人材確保に不安を抱えている。実務経験のない学芸員有資格者が博物館勤務となることも考えられ、内部での研修などの自助努力も必要であるが、県立博物館には「学芸員実務研修」のような取り組みをしてほしい。博物館機能の充実は一とえに学芸員の確保・育成にあると思う。
- ・ ぜひ指定管理者制度の対象外施設としてほしい。
- ・ 県内各博物館に専門資料を分散するようにして、県立博物館は他の館と重複した資料を持たないようにしたらどうか。県立博物館はすべての館の内容を把握し、指導と監督する機能をもってほしい。
- ・ 県立博物館は、県内の博物館の指導者的立場であるとともに、各館にとっての情報源であってほしい。県立博物館を中心として、県内の博物館が連携して、来館者の求める情報がどこの施設で得られるかを答えられるシステムが構築できるとよい。
- ・ 県という政治組織と風土という自然環境が一致しないのが三重県の特徴である。それが「伊勢は知っているが三重県は知らない」と言われる原因になっている。県民自体も三重県のことを知らないし、知らなくても何ら問題に感じていない。県立博物館には、そのことに気付くことができる場所となってほしい。例えば伊賀の人が志摩の魅力を知り、北勢の人が東紀州の魅力を知り、そこに訪れたいくなるような歴史文化・自然が一体となった展示が期待される。県外からの来訪者には、ここに来れば三重県のことわかる場所となってほしい。

- ・ 県立博物館で見た情報を各地で深められるような、また地域の施設で得た地域の歴史や文化などの情報を全県的な位置付けの中で知ることができるような、全県的な情報がクロスする場となってほしい。「ここを見たら県博へ、県博を見たらここへ」というふうに。
- ・ 各地への出張展示で、その先の博物館の展示と一体にして充実を狙えるような体制を築くとよいのではないか。そのためには、県立博物館は、全県のすべての館に対して、サテライト展示が行える施設であった方がよい。また、収蔵施設のない地域の文化財を収納できるような収蔵スペースも確保すべきだろう。災害時の文化財避難場所として位置付けられる施設となる必要があるのではないか。
- ・ 県立博物館所蔵資料の有効的な展示を行ってほしい。また県の核となる博物館であり、市町の博物館・資料館の中心となる機能を持ってほしい。そのためには、博物館のノウハウを集積し、県内外の施設との連携をもてるような組織作りをしてほしい。博物館としての最も大切な機能である収集・調査・研究・保存・教育・普及等を充実させ、21世紀の博物館を作っていただきたい。特に地方自治法の壁を乗り越え、教育基本法の壁も越え、博物館法の壁も超えるような博物館を作ってほしい。
- ・ 三重県の中心の博物館として県内各館との連携を持って活動してほしい。そして万が一閉鎖する博物館等が出てきたときには、そのフォローができるような体制ができないか。県内各地の博物館・資料館のまとめ役としての役割も発揮してほしい。人材の育成に努め、地方への出向や出前もできるような博物館となってほしい。
- ・ 県内各地域の博物館や資料館では予算も人員もすべてが減少傾向にあるが、各館の収蔵品目録や企画展ユニットなど共通して持てるものがあればよいと思う。
- ・ 指定管理者制度等の民間の活力を利用するの運営も必要かもしれないが、数十年間培ってきた博物館のノウハウを生かせる施設が望ましいと思う。単に集客や収支だけで、判断したり、数字での成果を成否の判断としたのでは、博物館の本来の目的から外れていってしまうと思われる。